

市史講座第 10 回ミニレポート

1 月 24 日(土)第 10 回の講座が開かれました。

第一部「松江の古寺と仏像 一願主と仏師」(講師:島根県立古代出雲歴史博物館学芸部長 的野克之先生)



的野先生はまず、仏像に記される銘文について説明されました。銘文が記される事例は少ないのですが、仏像が作成された年代、仏師、依頼者などの情報が記される場合があります。これらがすべて記される事は少ないのですが、仏像の作られた背景など様々なことが分かるそうです。島根県内の事例として、益田市の東陽庵の木造薬師如来坐像と、出雲市の鰐淵寺の銅造観世音菩薩立像の二軀の仏像を紹介され、その上で松江市内の二体の仏像について論じられました。

一つめは大庭町の浄音寺の木造十一面観音立像であり、かつて神魂神社の神宮寺(神社に附属した寺院)の本尊であった仏像です。この仏像は寄木造であり、口髭部分にのみ

彩色が施され、神社の神像と同じく彩色をほとんど施さない白木の像だそうです。また、大正時代の解体修理の際に、「文永□□正月□□」の年代と「院豪」の銘文が記録されていたそうです。将来的に像の修理が行われる際には、詳しい銘文が確認されるかもしれません。

この「院豪」という人物は、鎌倉時代半ばの京都三十三間堂の千手観音像の制作にも関わっていた仏師であり、島根県内では江津市の清泰寺本尊の木造阿弥陀如来像の、文永 7 年(1270)2 月 9 日の銘にも名前の見える人物です。京都周辺で活躍した仏師がなぜ、出雲での仏像制作に関わったかについて、的野先生は出雲地方に多く所在した石清水八幡宮領の荘園との関わりを想定されています。

二つめに玉湯町の報恩寺の木造十一面観音立像があります。奈良県の長谷寺木造十一面観音菩薩立像と同じ形式であり、「長谷観音」とよばれる仏像です。

この仏像は「雲陽誌」に鎌倉時代の仏師運慶の子康雲が作成したとありますが、昭和期に行われた解体修理工事により、天文 7 年(1538)4 月に出雲国の戦国大名であった尼子経久らを檀那として、仏師「康雲」により制作されたことが分かっています。よって鎌倉時代ではなく、それよりも時代の下った戦国時代の仏像ということになります。そこでの的野先生は、京都市の金光寺に伝わる「本朝大仏師正統系図并末流」を紹介され、鎌倉時代と戦国時代に康雲という同名の人物がいたことを説明されました。さらに戦国時代に活躍した康雲も、運慶の流れを組む仏師であることが分かりました。

また報恩寺の仏像は、天文 7 年に長谷寺の十一面観音菩薩立像が再建された際の余り木を用いて造られたという伝承も伝わり、京都との関わりの深さを伝えています。

最後に、仏像には銘文の記載のないものがほとんどであり、仏像美術史ではこれらを検討することで年代や作風を確認すること、そして松江市史の通史編でも仏像美術史に基づき、市内の仏像について取りあげることを述べられました。

第二部：「中海・宍道湖の自然環境」(講師:島根大学総合理工学部教授 三瓶良和 先生)

松江地域は、海水と淡水が出合う中海と宍道湖を中心にして、南北の山地に挟まれた自然豊かな環境に位置しています。その地域で、松江は水都として文化を開花させ歴史を刻んできました。先生はこの松江の歴史と文化を育て、伝えている特筆すべき自然環境を「中海・宍道湖の地質」「中海・宍道湖の地形」「中海・宍道湖の湖底環境」「中海・宍道湖の環境の未来」の4区分にしてお話になりました。

2000 万年以前、日本列島は大陸と地続きでした。1600 万から 1400 万年前頃に大陸周縁部が裂開し、激しい地殻変動と火山活動により日本海が誕生しました。そして、この頃を挟んでその前後に西日本は時計回りの 45 度回転南下し、東日本は反時計回りに回転しながら南下しました。この地殻変動により現在の日本列島が形造られました。

そして、中海・宍道湖は約一万年前に、最終氷河期後の海面上昇によって生まれました。7400 年前以降は、急速にこの水域の環境が悪化していきました。それは、縄文海進期による温暖化で有機質の腐泥(ヘドロ)が溜りやすい環境になったからです。縄文海進期ではこの周辺の水位は現在より 1~2m も上昇していたと云われます。しかし、中海・宍道湖は自然の浄化作用が働き、河川の大量土砂流入でヘドロも埋まり、薄められていきました。



松江を中心にして北部山地と中海・宍道湖の近辺の地質は堆積岩・火山岩・砂岩・泥岩質で、大陸と繋がっていたころの岩石・化石も多く産出されますし、黒色泥岩には僅かな石油、砂岩中にも少しの石炭層も見られますが、なんといっても中海・宍道湖地域の南部の山地には良質な磁鉄鋼を含む花崗岩が多量に存在し、この後、地域の経済を支えるたたら製鉄が行われました。

中海・宍道湖は斐伊川を通じて流入する大量の土砂や何度かの温暖化、寒冷化などの気候変動によって下流域はその形を変えていきました。その変化を1万年前、8000年前(縄文前期)、6000年前(縄文中期)、3000年前(縄文後期)、1200年前(奈良・平安期)、200～300年前(江戸期)、そして現在と、スライドによって説明され、中海・宍道湖の形成過程が写しだされました。

続いて人為的な行為が両汽水湖を改変していきます。江戸時代も干拓、新田化は行われましたが、現代になるに従いそれは大規模なものとなりました。中海の場合、弓ヶ浜干拓工事を例にし、工事で湖底泥が広く浚渫され、それによってできた多数の窪地は深い所で15cmに達し、窪地の面積は中海全体の10%におよび、そこは貧酸素水を湛えています。

この例のように中海・宍道湖は微妙なバランスが崩れると過栄養・富ヘドロ湖に変わってしまう危険性があります。最近の宍道湖ではアオコの増加も心配されています。将来の中海・宍道湖を劣悪・不毛の湖にせず、シジミをはじめ豊かな魚貝類を産する宝庫、湖として行くための調査・研究・対策が早急に求められる状況であると結ばれました。